

する。しかし、羅州地域の自衛団の組織化は順調に進まなかった。¹⁸やがて、1909年2月25日に羅州地域の主要郷吏家門の人々が中心になり、羅州郡民会が組織された。彼らの掲げた目標は教育の普及を期すること、実業の発達をはかること、愚民を勸諭・就善すること、外交上の敦厚をはかることなどであった。¹⁹郡民会を結成したのは、自衛団創設を要求する日本官憲の圧迫を回避しながら、義兵との極端な衝突や対立を避けようとする意図からであった。

なお、羅州の郷吏層と義兵の間には極端な対立はなかった。むしろ義兵に加わるよう勧誘する文章が送られたこともあった。²⁰一進会や自衛団を仇敵のように考えていた義兵も羅州方面では不思議なほど寛大であった。このようなやりとりは、1896年の義兵蜂起の教訓もあり、この時期の義兵と羅州の郷吏層が極端な敵対関係になかったこと、お互いに依然として親密な関係を続けていたことを示唆する。この他にも郷吏層の一部が義兵に協力していたことを示す状況もあった。²¹

1896年の義兵蜂起が郷吏側に打撃を与えたために、羅州郷吏層は郡民会を組織したが、これは義兵との極端な対立を回避すると同時に、自衛団創設を要求する日帝官憲の圧迫もある程度受け流しながら、自分たちの官職進出や社会経済的活動を安定して維持しようとする意図からであった。

3 日帝下における羅州郷吏出身者と地方有力者

(1) 羅州頤老会 羅州の有力者

1925年には羅州頤老会が郷吏層を中心に結成される。役員が多くが羅州の郷吏家の出身であった。頤老會の目的は養老親善、地方青年の教育に努めること、矯風正俗、境内の貧民生活事業を研究すること、そして地方の発展に尽力することであった。²²参加したのは総勢244名であった。人物の貫郷について分析すると、金海金氏が29名で最も多く、続いて密陽朴氏22名、慶州崔氏21名、密陽孫氏16名、羅州羅氏12名、宜寧南氏12名の順となっている。彼らのほとんどが韓末郷吏家門の出身であった。

羅州頤老会が結成されたのは1925年2月である。同会が結成された歴史的背景を見よう。

1924年末から25年頃は青年会の革新運動が本格化した時期であった。各地域の既存の青年会は大地主・富豪までも取り込んで、主に文化・啓蒙活動をしながら、地域名望家や一部の新興有力者層の紐帯を強めた。しかし、青年会の革新運動はまず大地主・富豪といった層を青年会から排除し、会議の運営方法も会長制から執行委員制に転換させ、活動の内

18 『自衛團에 관한 編冊』1908年2月26日、‘起案 自衛團 組織에 관한 제5회 報告按要’。

19 『한국독립운동사 자료 13 의병편 6』1909年3月2日、624頁。

20 「107. 羅秘發 第五二號」隆熙2年2月27日、『한국독립운동사자료 9 의병편 2』。

21 「127. 全國에 있어서의 폭도피해 및 其情況」『한국독립운동사 자료 13 의병편 6』424頁。

22 『羅州頤老會案』。